

# 読書記録

—研究者を目指す人のために—

近藤 則夫

『現代インド政治・比較政治学』

と考えるタイプの人間であった。彼が一九九二年に亡くなったとき、奥方が研究室を訪ねたが、動物研究部長は彼の研究室に入室させなかったという。彼のさかんな恋愛遍歴の証拠が山のように残されていたからである（参考文献②、一八五―一九〇ページ）。

このようなワイルドな研究者の生息を許してきた大英自然史博物館の度量の大きさには刮目すべきものがあるが、サッチャー首相が登場した一九八〇年代から徐々に「現実主義化」していったよう、役に立つ、メディアに取り上げられるような研究が重視され、テーマパーク化が進んだ。

強烈な個性といえば、デボラ・ブラムの『愛を科学で測った男…異端の心理学者ハリー・ハローウとサル実験の真実』（参考文献③）で登場する天才心理学者ハリー・ハローウ（一九〇五―八一年）も強烈である。ハローウは、「サルであろうが人間であろうが、もし幼児期に愛を学ばなければ、『おそろく、一生愛を学ぶことはない』（参考文献③、一八ページ）』ということをサルの実験によって初めて示した研究者である。戦前のアメリカ心理学会の主流の

アメリカ人で生物学の大御所、エドワード・O・ウィルソンは、科学者として生きている限り、自分のテーマに対する情熱を持ち続けることが必要であると述べている（参考文献①、六〇ページ）。

世紀に剥製や化石、鉱物に混じってこの博物館に生息した並外れた研究者の一部を紹介してみたい。

ランドルフ・カークパトリック

情熱をかき立てる刺激を得る自分なりのひとつの方法は、他分野の優れた研究者が何をどのようにやってきたのかその「生き様」を知ることである。そのためにはできるだけ極端な研究者の生き様を覗いてみるのがよい。それは、えてして自分が平凡な研究者でよかつたと慰みを得ることにもつながる。これに関してまずお薦めするのは

「貨幣石」と呼ばれる大型有孔虫の化石をどこにもあるものと信じ込み、火山から生まれる玄武岩のなかに時たまみられる円形文様も貨幣石と考え一九〇六年出版された『貨幣石世界』にその「発見」を掲載した（参考文献②、一九九ページ）。いうまでもなく溶岩のなかには動物は住めない。将来を嘱望され一九三二年に若くして古生物研究所に配属されたレスリー・ベアストウはあまりに完璧性を追求したため研究対象のジュラ紀化石の収集と分類に生涯を費やし、結局一九六五年に退職するまで一遍の論文も書かなかったという（参考文献②、一二二ページ）。もつともベアストウのコレ

クシヨンは後の研究者によって利用されその役目を果たした。また、ピーター・ロレンスは昆虫のなかでも最小のトビムシを専門としていたが、研究を進める内に躁鬱病に苦しみ一九八〇年代にはついに入院させられた。しかし並外れて創造的なロレンスは躁病患者が「ハイ」なとき如何にすばらしい仕事を成し遂げられるかをまとめた『すばらしき躁病患者たち』を一九八九年に出版した（参考文献②、二九九ページ）。魚類のニシン科の権威で名著『世界のニシン目魚類』を一九八五年から八八年にかけて出版したピーター・J・ホワイトヘッドは恐ろしく自己中心的な人物で、「お役所仕事」や「会社人間」を嫌悪していた。フ

リチャード・フォーティの『乾燥標本収蔵1号室——大英自然史博物館 迷宮への招待』（参考文献②）である。大英自然史博物館は大英博物館の自然史部門が一八八一年に分離したものである。二〇

オーティの言い方によると仕事場にはネアンデルタール人ならいても良いが会社人間の居場所はない

「おそろく、一生愛を学ぶことはない」（参考文献③、一八ページ）ということをサルの実験によ

考え方では赤ちゃんを抱きしめたりあやしたりする母親のあからさまな愛情は子どもを軟弱にし、依存心の強い大人に育ててしまうと考えられ、それゆえに子どもは隔離されて育てられるのが科学的とされた。しかしハロウはこのような「定説」をあざ笑った。彼は生まれたての子ザルに、柔らかい布製の代理母と針金製の代理母を与えた比較実験で、柔らかく慰撫してくれる母親がいない場合、子ザルは不安定で奇妙な行動を示すとをみいだした。子ザルにとって母親は単なる母乳の出るところではなく、「接触による安らぎ」によって、危険や恐怖から逃れ安心していられる精神的絆を与えてくれる基盤であることを「発見」したのである（普通の人間の母親はそのような実験をするまでもなく、知っていたのだが）。それが意味するのは人生最初の段階である幼少期に愛情欠落によって安心感を得られない者は思い切った次の段階に成長することが難しい、つまり、幼少期の愛情関係をうまく築けない者は他の者と交わり、さらには社会に出て独り立ちすることがスムーズに行かないということ

であった（参考文献③、二一〇～二一四、二五六～二七一ページ）。母親の愛情は成長するために決定的に重要なのである。

ハロウの業績が偉大なものであったことは間違いない。しかし、彼はつむじ曲がり、発言は攻撃的で自制を知らなかった。ある講演会では「もつとも侮辱的であからさまに愚弄する性差別発言」がちりばめられ、女性の怒りをつかた（参考文献③、三一八～三二〇ページ）。また、サルに対する実験の多くは悲惨なものであった。赤ちゃんザルに対する実験は度を越した過激なものであった（参考文献③、三八二ページ）。一年間隔離され社会を剥奪されたサルはもはや生き物とはいえないものになった。彼はキャリアの後半にはフェミニストや動物愛護団体の非難の的となった。そこにはフェミニズムや動物実験に対する倫理問題へ意識が広まりつつあったという時代背景もあったのであるが。

さて、最後にエドワード・O・ウイルソンに戻ろう。ウイルソンは昆虫大好き少年で大学に入学する時に既にアリの研究をすることを決め、進化生物学者、社会生物学者として成功した。彼が科学者

に求められる資質として最も重要と考えたのが情熱であることは前に述べた。それでは他の資質についてはどうか。彼は成功する科学者とは必ずしも天才ではなく、進取の気性をもち努力を惜しまない

「そこそこ」頭の切れる程度の頭脳をもつ者ではないか、と述べている。なぜならIQの高い者（天才）は初期の学問的訓練は簡単すぎ、データ収集と分析という必要ではあるが退屈な作業にやりがいを感じられず、科学のフロンティアという険しい道を好んで選ぶとはあまり思えないから、ということである（参考文献①、六〇～六三ページ）。また彼は最近の傾向としてシンクタンクやチームで研究することがもてはやされる現実について次のように述べている。すなわち、「本当に新しい科学を創るのにチーム思考が最良の方法といえるだろうか。異端のそしりを覚悟のうえで、私はノーと言おう」（参考文献①、七四ページ）。

以上をまとめると、平凡な能力の研究者でも新しいことにチャレンジする情熱をもって一人地道な努力を続けることで成功への道が開けると読める。天才・奇人・変人でない平凡な研究者にとって、ま

ことに母親の愛情のように安心感を与えてくれる言葉である。

（こんどう のりお／アジア経済研究所 南アジア研究グループ長）

#### 《参考文献》

①エドワード・O・ウイルソン（翻訳：北川玲）『若き科学者への手紙——情熱こそ成功の鍵』創元社、二〇一五年（Edward O. Wilson, *Letters to a Young Scientist*, New York: Liveright, 2013）。

②リチャード・フォーティ（翻訳：渡辺政隆・野中香方子）『乾燥標本収蔵1号室——大英自然史博物館 迷宮への招待』NHK出版、二〇一一年（Richard Fortey, *Dry Store Room No. 1: The Secret life of the Natural History Museum*, London: Harper Collins, 2008）。

③デボラ・ブラム（翻訳：藤澤隆史・藤澤玲子）『愛を科学で測った男・異端の心理学者ハリ・ハロウとサル実験の真実』白揚社、二〇一四年（Deborah Blum, *Love at Goon Park: Harry Harlow and the Science of Affection*, New York: Basic Books, 2002）。